URL：http://www.jmrf-nanbyou.org

一般財団法人
難病治療研究振興財団ニュース

Vol.6-3 July 2018 発行：一般財団法人難病治療研究振興財団

第 5 回Bio-Symposiumの報告

平成30年6月23日（土）に三重県志摩市にて第5回Bio-Symposiumを開催いたしました。

今回は4名の先生方に「地域医療におけるリウマチケア」についてご講演いただきました。
東京以外の地域において初めての講演会となりましたが、初回にも関わらず多くの方々にご来場いただき、会場は熱気にあふれていました。
※当日の抄録を最後に掲載しております。

西岡久寿樹理事長

西岡洋右先生

本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします

第1部【地域でのバイオ治療構築を目指して】では、三重大学医学部整形外科講師の若林弘樹先生に「HABセントラルクリニックのバイオ治療の現状と展望」についてご講演を頂きました。

この講演では、臨床の現場で広く活用されているバイオ製剤について、若林先生が使用されている各種のバイオ製剤の治療継続率、薬剤の切り替えについての検討、及び治療成績と各々のバイオ製剤の特徴について分かりやすく解説してくださいました。

若林弘樹先生

講演後の質疑応答では、フロアから様々な質問がありました。

本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします

第2部【地域におけるリウマチ性疾患のトータルケア】では、品川秋野先生(霞が関アーバンクリニック看護師長)に「日本リウマチ財団リウマチケア看護師の役割」、長島誠先生(伊勢調剤薬局薬剤師)に「日本リウマチ財団登録薬剤師の役割」と題してご講演をいただきました。

品川秋野先生

品川先生には、看護師の立場から見た関節リウマチ、各種膠原病、脊椎関節炎、乾癬などの様々な領域に及ぶ疾患群におけるBio careを中心とした患者様へのケアフローを紹介していただき、今後の関節リウマチのみならず広範囲なリウマチ性疾患治療の中心となってくると考えられるバイオ治療へのケア体制確立の重要性について解説していただきました。

長島先生には、チーム医療の基盤である医療機関及び各診療科の連携と各職種の連携を基盤として「国民ひとりひとりが住み慣れた地域で健康で安心して暮らせる社会の実現」という目標に向けて、リウマチ性疾患における専門職の育成、及び地域間格差の是正に取り組むことの重要性とその実現のために、登録薬剤師の果たすべき役割について解説していただきました。

長島誠先生

本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします

最後に、本財団の西岡久寿樹理事長が「バイオケアユニットの確立」について講演をいたしました。
この講演では、現在広く活用されているバイオ医療の将来像、及び開発状況と臨床に応用された時の現場で起こると思われる「混乱」を交通整理することが重要であること、バイオユニットの確立、そして、これからのバイオ治療の方向性について解説いたしました。

本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします

抄録1

HABセントラルクリニックのバイオ治療の現状と展望
~500症例の解析結果より~

若林弘樹

三重大学医学部整形外科　講師

関節リウマチ(Rheumatoid arthritis：RA)に対する薬物治療は生物学的製剤の登場により飛躍的に進歩した。2003年にインフリキシマブが登場し、その後エタネルセプト、アダリムマブ、トシリズマブ、アバタセプト、ゴリムマブ、セルトリズマブペゴルと多くの生物学的製剤が次々と承認され、本邦でも様々なエビデンスが構築された。また、バイオシミラーとして2014年にインフリキシマブ後続が認可され、本年にはエタネルセプト後続が認可される。

これまでセントラルクリニックでは生物学的製剤を早期から導入し、多くの関節リウマチ患者の治療に貢献してきた。生物学的製剤の治療により治療効果がみられる症例がある一方で治療効果が一次無効や二次無効となる症例や合併症のため治療継続を断念せざるを得ない症例も存在する。治療無効症例については薬剤の切り替えを、合併症が生じた症例でも可能であれば薬剤切り替えにて対処し、生物学的製剤治療継続を行っている。

これまで導入した500症例を超える各生物学的製剤の治療継続率および切り替え薬剤の種類について検討し、その傾向について報告する。また、これまで三重大学医学部附属病院でのRA症例と共に報告した各生物学的製剤の治療成績についても報告し、各薬剤の特徴について報告する。

本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします

抄録2

日本リウマチ財団リウマチケア看護師の役割
～Bio careナースのミッション～

品川秋野

霞が関アーバンクリニック　看護師長
日本リウマチ財団　リウマチケア看護師

日本リウマチ財団には財団創設時から教育研修制度（リウマチ登録医制度）があり、これまで多くのリウマチ登録医が全国に輩出され、それぞれの地域でリウマチ性疾患治療の核となっています。また、この登録医と同様に看護師、薬剤師にも焦点が当てられ、リウマチ性疾患のケアエキスパートとして各医療機関で患者ケアの中心的な役割を果たし活躍をしています。

リウマチケア看護師は平成22年4月1日に正式に日本リウマチ財団の教育研修制度の一つとして発足しました。平成30年4月末日付で1,573名のリウマチケア看護師が日本リウマチ財団に登録し、各々が所属している医療機関でリウマチ性疾患の治療に際し、特にバイオ治療のケアエキスパートとしても患者様のケア等の中心となって活躍しています。

TORAM NETグループの一つである東京都千代田区の霞が関アーバンクリニックでもリウマチ財団リウマチケア看護師がバイオケアナースとして日本リウマチ財団から認定を受け、さらに看護師全員がリウマチケア看護師を取得するため様々な研修会、研究会に出席し研鑽を積んでいます。

リウマチケア看護師の重要な役割は「**患者様の生の声を直接聞く**」ということに集約されています。特に、バイオ治療によるリウマチ性疾患において外来の看護師による患者様へのインフォームドコンセントの確立及び治療経過の観察、患者様からの質問への対応などのケアの面からもとても重要な業務の一つと言えます。

私達がBio careの中心として行っている中で、関節リウマチ、各種膠原病、脊椎関節炎、乾癬などの様々な領域に及ぶ疾患群を対象に、患者様へのケアフローをご紹介するとともに、今後、関節リウマチのみならず広範囲なリウマチ性疾患治療の中心となってくると考えられるバイオ治療へのケア体制について紹介いたします。

本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします

抄録3

日本リウマチ財団登録薬剤師の役割

長島誠

伊勢調剤薬局磯部店　薬剤師
一般社団法人伊勢薬剤師会　副会長
日本リウマチ財団　登録薬剤師

現在、リウマチ性疾患の薬物療法ではDMARDsのみならず、生物学的製剤も多数の患者に使用されており、使用に当たっては非常に高度な専門知識が必要とされています。

これらリウマチ性疾患の薬物療法に精通した薬剤師を育成し、公益財団法人日本リウマチ財団の登録医、ケア看護師等と連携・協働して、リウマチ性疾患にかかる医療技術の進歩、医療水準の向上を図り、よりよい医療を提供するため、平成26年4月に登録薬剤師制度が発足しました。

「国民ひとりひとりが住み慣れた市域で健康で安心して暮らせる社会の実現」という目標に向けて、チーム医療の基盤である診療間の連携と職種間の連携をさらに進め、リウマチ性疾患における専門職の育成、および地域間格差の是正に取り組むことはますます重要となってきています。その実現のため、登録薬剤師の果たすべき役割を紹介します。

本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします

抄録4

バイオユニットの確立
～これからのバイオ治療の方向性～

西岡久寿樹

政策研究大学院大学Global Health Care　Director
日本リウマチ財団　常務理事
難病治療研究振興財団　代表理事

2003年、日本の臨床現場に関節リウマチにTNFα阻害剤というバイオ医薬が登場した。いわばバイオ元年とも言える記念すべき年である。このバイオ医薬の登場によりリウマチ治療に変革がもたらされ、リウマチ治療の夜明けが来たことを強く印象付けた。
Sir Maini、P.E. Lipskyらが、ワシントンDCで開催した世界で初めての国際バイオシンポジウムで、TNFα阻害剤の関節リウマチに対する臨床成績の発表会場は基礎・臨床の研究者たちの異様な熱気と緊張感に包まれていた。さらにその翌年、ヨーロッパの大西洋に面するフランスのブレストで開催されたEUブレスト会議はエタネルセプトの臨床データも含めて凄まじい熱気がこもっていた。
このような世界での状況に数年遅れはしたが、臨床試験、二重盲試験を経て、日本で初めてインフリキシマブが関節リウマチの初のバイオ製剤として承認され、その後次々とバイオ製剤が承認され現在に至っている。日本初のバイオであったインフリキシマブやエタネルセプトの臨床試験の成績結果には息を飲むような緊張感があったのを今でも鮮明に思いだす。
このような経緯によって日本でのバイオ製剤の正式な薬価収載され、関節リウマチや種々の難治性疾患の治療に広く用いられるようになってきた。さらに、現在約420個の分子を標的にして神経内科、呼吸器科、皮膚科、骨関節系、血液内科等多くの分野に多彩なバイオ医薬品の開発、さらにはDNAワクチンなどの研究が進んでいる。これらの医薬品は臨床医学の現場に一大変革をもたらすことが考えられるが、その対応には診療科の垣根を超えた緊急の政策的課題が必要である。
また、今後のバイオ薬剤の開発状況と臨床に応用された時に現場で起こるであろう「混乱」の交通整理の重要性についても述べてみたい。

次回のBio-Symposiumは本財団ホームページにてご案内いたします。

一般財団法人難病治療研究振興財団　事務局
〒100-0013東京都千代田区霞が関1-4-1日土地ビル1階
電話:03-3580-8532　FAX:03-3580-8533　E-mail:info@jmrf-nanbyou.org
URL: http://www.jmrf-nanbyou.org/
本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします